
フロベール『ブヴァールとペキュシェ』における 科学論的両義性の解釈について

和田光昌

〈西南学院大学〉

Résumé

Dans *Bouvard et Pécuchet*, l'ambiguïté épistémologique résulte moins de la question de savoir d'où l'écrivain a tiré tel ou tel savoir pour écrire un épisode scientifique, que du processus d'assimilation du savoir dans le récit. L'examen de l'*incipit* de trois chapitres, I, III et X, nous montre différentes modalités de la narrativisation du savoir : fausse causalité provenant d'une fausse rencontre avec un fait météorologique pour le chapitre I, transformation de l'incompréhensible en l'assimilable pour le chapitre III, condensation poussée à l'extrême de deux idéologies pédagogiques contradictoires dans la même phrase pour le chapitre X. C'est une foi profonde dans la fonction presque grammaticale de la langue qui s'impose.

フロベールのエクリチュールにおける両義性については、多くが語られてきた。「未決定状態」や「決定不可能性」ということばと共に、両義性はフロベールを読み解くためのキーワードの一つだった。ヌーヴェル・クリティックのフロベール、ヌーボー・ロマンの先駆者としてのフロベールについては特にそうである。一方、広大な前テキストを渉猟する生成批評の側からは、ピエール・マルク・ド・ピアジが「未了の詩学」¹と呼ぶものが主張され、「決定稿」という概念に異議が唱えられた。これらの解釈の試みは、すべて、いわゆる「テキストの快楽」をより豊かなものにするため、認識上のある種の厚みを与えることを目的としていたといえよう。

フロベールの遺作『ブヴァールとペキュシェ』で全編に渡って展開される「科学論的両義性」についてはどうだろうか？ ここで「科学論的両義性」と呼ぶのは、知と物語との出会い、あるいは衝突、知の物語内への吸収、知の物語化などから生じるあらゆる種類の解釈上の両義性のことである。

「笑劇形式の批評的百科事典」と呼ばれるこの小説において、一つ一つの科学の挿話は、相反する様々な理論の合成物である。合成物ではあるが、その輪郭ははっきりしている。なぜなら、第一に、作者自身が作成した読書ノートによって、各挿話の出典がしばしば明らかになっているからであり、第二に、両立不可能な学説が混合されているまさにその事実によって、科学史上のある瞬間がどのようなものであったかを正確にあらわしてみせているからである。作家の残した読書ノートがあれば、典拠（原資料）を見いだすことはさほど困難なことではない。問題は、フロベールが、ある知をどこからとったかではなく、どのようにそれを物語のなかに配置しているか、どのように「舞台にかけて（＝演出して）」いるかを知ることなのである。すなわち、問い直されるべきなのは、作家個人の科学理解を通してかいまみられる、科学と文学の関係そのものなのである。ボードリのような同時代人たちが、揶揄混りに、あらゆる科学について精通することが果

1 Pierre-Marc de Biasi, « Flaubert et la poétique du non-finito », *Le manuscrit inachevé*, CNRS éditions, 1986 を参照。

たして一介の小説家に可能なのかという懸念を本人に隠すことなく表明していた時代は過去のものにすぎない。アルベルト・チェントやクロディーヌ・ゴトメルシュによる校訂版と、とりわけ生成批評の貢献によって、この小説の持つ科学論的射程は一般に認められるようになった。しかし、問題は残っている。文学と科学はどのようにからみあっているのか？ 知は、物語のなかに吸収されるにあたって、美的要請に従わなければならないのか？ フロベールは、しばしば言われたように、美的基準を優先させ、知をそれに合わせて利用しているのだろうか？ 別の言い方をすれば、知は「テキストの快楽」に貢献しているのだろうか？ それとも、テキストが物語として読まれることが可能な限度内にとどまるために、知はたわみ、変形され、簡略化されなければならないのだろうか？

これらの問いかけに答えるために、ここでは、『ブヴァールとペキュシェ』の三つの章の「書き出し [incipit]」の解説を試みることにしたい。取り上げるのは、第1章、第3章、第10章である。

I 第1章の「書き出し」におけるにせの因果律

この小説の最初の一文はよく知られている。

Comme il faisait une chaleur de trente-trois degrés, le boulevard Bourdon se trouvait absolument désert².

33度の暑さだったので、ブルドン大通りには人気が無かった。

この「書き出し」には、なにかおかしなものがある。厳密に考えると、「ブルボン大通りには人気が無かった」のは、「33度の暑さ」のせいだとは言えない。人気がないという説明として十分ではない。それがちょうど33度であって、なぜ32度あるいは34度ではいけないのか説明できるだろうか？ 『ブヴァールとペキュシェ』の最初の章の最初の一語「*comme*」（「～なので」）は、にせの因果律をもたらしている³。これは、書き換え作業の結果として、推敲のある段階で起こった、行間の加筆である。具体的にはフォリオ4 verso, g225⁽¹⁾に見られる、熟慮の上の選択である。

Comme [comme] Il faisait une chaleur de trente trois degrés [& comme c'était un] dimanche, le boulevard Bourdon se trouvait absolument désert⁴.

33度の暑さだった くので [そして] 日曜 [だったので]、ブルドン大通りには人気が無かった⁵。

「*comme*」の語が移動しているのがわかる。「33度の暑さであり、そして日曜だったので」が「33度の暑さだったので」へ置き換えられる作業はほとんどここで完成している。

この「*comme*」（「ので」）の位置の移動は何を意味するのだろうか？ このようにして得られた「書き出し」には、科学論的両義性は見当たらないようにみえる。いかなる理論も、学説も持ち出されてはいない。しかし、単なる気温の数値（「33度」）でさえも、一つの科学的事実となりうることは、金獅子亭で、オメーが、ヨンヴィルに到着したボヴァリー夫妻を前にして土地の気候について一席ぶつときの結びの部分を思い出せば理解されるだろう。彼は、摂氏、烈氏、華氏などの異なった温度計測法を——しかも誤って——換算しているのだ。

2 Flaubert, *Bouvard et Pécuchet*, chronologie, présentation, notes, dossier, bibliographie par Stéphanie Dord-Crouslé (BP), GF Flammarion, 1999, p. 47.

3 アンヌ・エルシュベール・ピエロは、書き出しの「*comme*」を「まじりけのない因果律の凝縮」とみなし、33度という、3という数字の反復は「パロディーとしての因果律」の効果を高めていると述べている。cf. Anne Herschberg Pierrot, « Etude génétique de l'incipit de *Bouvard et Pécuchet* », *Equinoxe*, n. 16, printemps 1999, pp. 83–95.

4 イタリック体の語は加筆、ブラケット []内の語は削除を表す。

5 日本語訳のなかの [] は加筆を表す。

このように、二人の主人公の出会い、小説のエクリチュールが、科学的——この場合は気象学の——事実と場違いな出会いをしたことから始まる。科学的事実と日常の出来事との懸隔は、「comme」（「ので」）という、説明になっていない科学的説明によって導かれる。科学的事実とのにせの出会いが、それ以降ブヴァールとペキュシェによって企てられる全ての百科全書的研究の失敗の前兆となっているとも考えられる。

II 第3章の「書き出し」

いわゆる自然科学に捧げられた小説第3章は、まず化学から始まる。前章における農業についての失敗の最後を飾る（醸造過程における）試験管の爆発がなぜ起こったかを理解するために、化学の研究が必要となったのである。第3章の「書き出し」は以下の通りである。

Pour savoir la chimie, ils se procurèrent le *Cours* de Regnault — et apprirent d'abord que « les corps simples sont peut-être composés »⁶.

化学を知るために、彼らはルニョーの『講義』を入手した——そして、「単体も化合物であるかもしれない」ということをまず学んだ。

見たところ両義的なものは何もないように思われるこの一文のうち、われわれの考察の対象となるのは、ダッシュ（「——」）以下の後半、すなわち、「そして、『単体も化合物であるかもしれない』ということをもまず学んだ」とある箇所である。テキスト中に名が挙げられているルニョーの書物でも説明されているように、これは、化学分析の新たな方法が発見されたことによって化学という知が更新される可能性について述べられたものであると考えられる。化学が長足の進歩を遂げたこの時代、そのようなことは頻繁にあったはずである。

しかし、下書きを検討すると、この化学の挿話の推敲過程全体にわたって、二人の主人公は、化学知の更新の可能性を認めるどころか、疑念を抱き、形而上学的立場から反論さえ試みていたことが確認される。そして、それは、最終稿の直前までそうなのである。フォリオ319verso, g225⁽¹⁾では、次のように記載されている。

Pour savoir la chimie, ils se procurèrent le *cours* de Regnault *et apprirent d'abord* [un premier doute les arrêta [gêna] en apprenant] que les corps simples sont peut-être composés.

化学を知るために、彼らはルニョーの『講義』を入手した。〈そして〉単体も化合物であるかもしれないということを〈まず〉[学ぶと、最初の疑念に彼らははたと立ち止まった [〈困惑した〉]] 〈学んだ〉。

「書き出し」はどのように変容したか。まず、フロベールは、「化学を知るために、彼らはルニョーの『講義』を入手した。単体も化合物であるかもしれないということを学ぶと、最初の疑念に彼らははたと立ち止まった（困惑した）」と書いていた。それを、「～を学ぶと、最初の疑念に彼らははたと立ち止まった」という箇所を削除した上で加筆し、その結果、「化学を知るために、彼らはルニョーの『講義』を入手した——そして、『単体も化合物であるかもしれない』ということをもまず学んだ」⁷という文が得られたのである。

この変更は何を意味するのだろうか。それは、はじめは「疑念」として提示されていたものが、化学について習得した知に変えられたということである。それまで——すなわち「書き出し」の最終稿の直前まで——二人の主人公が理解できなかった事柄が、最終稿においては、突如として、彼らが化学講義の第一課か

6 BP, p. 106.

7 下線は引用者。

らただちに理解し吸収する事柄になるのである。

この「疑念」という語の起源、あるいは生成論的な変遷についてここで詳しく述べることはできない。ただ指摘しておきたいのは、より初期の稿に遡ると、ペキュシェの反論はさらに激しいものになることである。例えば、フォリオ214には次のような記述がある。

「単体が化合物である」というのはまだよい——単体などというものがあるとしての話だが？——、しかし、「化合物（複合体）の粒子（分子）(molécule)が合成的である」などということは、絶対ない。

ここで用いられている、通常「分子」と訳される«molécule»という語に注目すべきである。なぜなら、ペキュシェの頭に入らないのは、まさにこの«molécule»（「分子あるいは粒子」）という考え方だからである。そのせいで、倍数比例の法則を彼は理解できない。ペキュシェが何に困惑しているかを理解するには、必ずしも倍数比例の法則が何であるかを知る必要はない。根本的原因是、「もともと形而上学的な性質の」⁸ペキュシェが、原子と分子を区別できないことにある。最終稿において、「もしそれ [molécule] が分解するのであれば、最小単位、原初の粒子 (molécule primordiale) であることを止めてしまう。やっぱり理解できない」⁹と彼が言うとき、分子と原子を混同しているのである。それは、«molécule primordiale»の«molécule»を「分子」と訳すと「原初の分子」となり意味をなさなくなってしまうことから理解される。ペキュシェのmolécule理解はデイドロの段階にとどまっているともいえる。いずれにせよ、現代の化学において、化学反応が起こるとき、分子が異なったいくつかの部分——すなわち原子——に分割されると想定することはごく当然のことにすぎない。

従って、単体と化合物の区別に関する「疑念」は、分子という概念の混同、あるいは無理解に由来していると言える。この無理解から何が導かれるだろうか？ どのように解釈すればよいのか？ 専門的知識に欠けていると作者をとがめることは厳に慎まねばならないと思う。なぜなら、このときのフランス化学界は、専門家といえども、原子の存在を認めることができない、あるいは認めてはならなかったような状態にあったからである。化学史の多くのマニュアルを参照すれば、原子論は19世紀フランスにおいて普及するのに大変な困難があったこと、そして、当時影響力のあった化学者ジャン＝バティスト・デュマの、『ブヴァールとペキュシェ』第二巻に収められるに十分値する言葉、「もし私が科学の世界を司る長であるなら、〈原子〉という言葉が科学から消し去ることだろう」¹⁰という言葉がしばしば引用されていることがわかるだろう。デュマも含め、原子を頑なに認めようとしなない立場のものたちは、当量論者と呼ばれていた。そして、『ブヴァール』で用いられているマニュアルの著者ルニョーもまた、当量論者なのである。となると、分子と原子の区別に関する無理解は、もはやたんなる文学者のそれではなくなり、化学者の集団である学会全体のものになる。「最初の疑念」を「まず学んだ」に置き換えることは、にせの学びを導入することである。ブヴァールとペキュシェのにせの学びは、原子を認めなかったにせの化学に呼応している。置換によって隠蔽された彼らの「最初の疑念」は、物語と科学史との精妙な符合を浮かびあがらせている。

III 第10章の「書き出し」

第10章の「書き出し」で顕著に見られるのも、イデオロギーと物語との間の、この種の精妙な呼応である。それは、次のように書き出されている。

8 Folio 214, g225⁽¹⁾.

9 BP, p. 106.

10 Jean-Baptiste Dumas, *Leçons sur la philosophie chimique, professées au Collège de France par M. Dumas, recueillies par M. Bineau, Ebrard, 1837, p. 290.*

Ils se procurèrent plusieurs ouvrages touchant l'éducation — et leur système fut résolu. Il fallait bannir toute idée métaphysique, — et d'après la méthode expérimentale suivre le développement de la nature¹¹.

彼らは、教育についての書物を何冊も入手した——すると彼らの方針は固まった。あらゆる形而上学的概念を追放すること、——そして実験的方法により、自然の発達に従うことが必要だった。

ここで考察の対象とするのは、後の文の、やはりダッシュ（——）、ここでは二番目のダッシュの後の下線部分である。ここで明らかにしたいことは、この文が理解不能であり、しかもそれは、化学の場合のように学習内容が理解困難なためではなく、ここで言及されている二つの教育法の矛盾によるものである、ということである。二つの教育法とは、「実験的方法」と、「自然の発達に従う」教育法を指している。

大まかに言えば、この二つの教育法の対立とは、ポジティヴィスム（実証主義）とルソーの間の対立と言える。教育学に応用された実験的方法とはどのようなものになるのだろうか？ それは、骨相学を児童教育に応用することで、ブヴァールとペキュシェが設立することを夢見る、「知力を鍛え直し、恭順な性格をつくり、こころを高貴にする施設」¹²、下書きで「精神矯正院」と呼ばれているような類いのものだろうか？ いずれにせよ確かなのは、1880年2月15日に開始されたこの第10章の執筆時、「実験的」という語が流行していたことである。ただちに思い浮かぶのはゾラの「実験小説論」だが、この評論は、*Le Messager de l'Europe* 誌1879年9月号、および *Le Voltaire* 誌同年10月号に掲載されている。この同じ10月に、フロベールはモーパッサンに宛てて次のように書いている。「写実主義とか自然主義とか実験的とかいう話はよしてくれ！ 飽き飽きしたよ。なんという空虚な愚劣事であることか！」¹³ ゾラの評論がとくに言及されているわけではないものの、「実験的」という語と「自然主義」とが並べて挙げられていることから、フロベールはゾラの「実験小説論」を目にしたか、あるいは話題になるのを耳にしたと考えてよいだろう。また、実験的なものが流行していたのはなにも文学だけではない。例えば、テオデュール・リボは、同年、『現代のドイツ心理学（実験学派）』という書物を刊行し、そこで旧来の心理学と、「実証精神を排除し、科学的方法を用いることを妨げる」「形而上学的精神」¹⁴を批判している。普仏戦争の敗北から教訓を導き出し、ようやく立ち直ろうとしていたフランスが、ドイツモデルに依拠して、より科学主義的な教育を導入しようと改革を進めていたこの時代、文学においても、心理学においても、「実験的」という語で引き合いに出されるのはポジティヴィスムであった。

他方、第10章「書き出し」で言及されているもう一つの、「自然の発達に従う」教育法について言えば、ルソーの『エミール』のことを想起しないわけにはいかない。『エミール』本文のなかにそっくり同じ表現は見られないものの、また、フェヌロンの『女子教育論』のなかに、「自然に従い、助けるだけで満足しなければならない」¹⁵という類似の表現があるとしても、「自然の（による）教育」という思想を、その社会批判としての射程の大きさとともに十全に開示した功績はルソーに帰せられるべきである。子供の自然な発達を妨げてはならないと彼は考えている。「あなたが自然のかわりとなってむやみに働きかける前に、自然の働きが作用する長い間そのままにしておきなさい。その作用の妨げになるといけないから」¹⁶。この教育法を、彼は「消極教育」と呼んでいる。

このように、第10章の「書き出し」は、二つの教育法の共存の産物である。ここで注目すべきなのは、

11 *BP*, p. 346. 下線は引用者。

12 *BP*, p. 352.

13 モーパッサン宛、1879年10月21日。

14 Th. Ribot, *La psychologie allemande (école expérimentale)*, Germer Baillière, 1879, p. III.

15 Fénelon, *De l'éducation des filles*, *Œuvres*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », tome 1, 1983, p. 99.

16 Rousseau, *Émile*, *Œuvres complètes*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », tome IV, 1969, p. 343.

この二つが互いに矛盾することである。ポジティヴィストたちは、「中途半端な破壊者」¹⁷だとしてルソーを決して評価していなかった。それには、歴史的あるいは状況的な理由だけではなく、原理上の、したがってより根源的な理由も認められる。すなわち、子供の生まれながらの（＝自然的な）善性を認めるかどうかという問題である。ルソーの主張するような「消極」教育は、子供は誰でも生まれつき善性を持っていることを前提とすることなしには決してありえないだろう。それに対し、「実験的」すなわち——「ポジティブ（積極的）な」とまでは言わないまでも——ポジティヴィズム的教育は、むしろ、人間の諸能力の不平等性に基づいている。『知育と徳育』の著者でもあるシャルル・ロバンは、ウージェーヌ・ブールデの『実証教育の諸原理』に寄せた序文のなかで、「ガルやブルーセ、オーギュスト・コントの後に、ラルマン教授は、[中略]一人一人の子供は、顔や背丈が様々であるのと同じように、知的、道徳的能力、またその他の能力にも不平等性がある」¹⁸と明言している。人間の諸能力の不平等性を認めることは、必ずしもプラン書きが想定している「性悪説」と同じものではないが、人間の自然的善性を認める立場と鋭く対立することには変わりはない。

下書きにおいて、この対立はより際立っている。「書き出し」そして章全体を、対立する二つの思想から構築しようとするテキストの配慮はつねに存在していた。最大の拡張期、すなわち、フロベールの書き直し作業の通常の間から削除という次の段階で漸進的かつ極端な減退の一途をたどることになる直前、テキストが最大量に達したときの下書きは、もっとも間テキスト性に富んでいる。例えば、われわれの分類によれば第四稿にあたるフォリオ 329 verso, g225⁽³⁾では、様々な(教育書の)作家が列挙されている。エメ＝マルタン、フェヌロン、バルム＝フレゾル、ジャンリス夫人、カンパン夫人、ギゾー夫人、レミュザ夫人、デュパンルー、ルソー、そしてロックである。テキストは次のようにまとめている。「これらすべての作家のなかによいものがある。彼らは賢明なる折衷主義を用いる。」そして、列挙された一連の名の直前には、次のような教育の定義が記されている。

教育はどのようなものであるべきか。「個人の人格にたいし社会性を優先させる習慣をつけることによって、他者のために生きることを学ぶこと」(コント)

—個人の理想を生み出すこと。ジャン ポール リヒター (エメ マルタン)

—自ずから個性が陶冶されること。ラブラド

—一生を学ぶこと (同上)

これら四つの定義のうち、とくに最初の二つは、他のものよりも持続的に前テキストのなかにとどまることになる。第二稿から第四稿までの間は、コントとリヒターしか名指しされていなかったのである。ジャン＝ポール・リヒター(ジャン・パウル)は、ルソーの教育思想の熱烈な支持者として知られている。コントについては、彼の定義をフロベールは前述のブールデの本のなかで読んでいた。ルソー主義とポジティヴィズムの対立は明らかである。

このように考えると、「書き出し」の一文で用いられている二つの教育法は、これら二つの定義の要約とみなすことができる。とはいっても、それは通常の意味での要約ではない。なぜなら、二つの定義がこのように一つの文のなかで凝縮され、しかも両者の結合が生み出すはずの矛盾については何の言及もないことから、この一文は理解不能なものとなっているからである。これは、もはや二人の主人公たちが採用を決めたとされる「賢明なる折衷主義」の範疇を優に超えている。そしてきわめて興味深いことに、「折衷主義」という語が削除されると、「自然」という語が「書き出し」に出現するのは、まさに同じ第六稿において

17 Auguste Comte, *Catéchisme positiviste ou Sommaire exposition de la religion universelle* [1852], Garnier, 1909, pp. 4–5.

18 Eugène Bourdet, *Principes d'éducation positive, nouvelle édition entièrement refondue, avec préface du professeur Ch. Robin*, Germer-Baillière, 1877, pp. XIII–XIV.

なのである。第五稿であるフォリオ329verso, g225⁽³⁾においては「彼らの段階的な発達に従い、それに合わせる」とあったものが、第六稿のフォリオ322verso, g225⁽³⁾においては、「彼らの自然の [段階的な] 発達に従うこと」¹⁹となる。「彼らの自然」という部分は、さらに手直しされ、「彼らの」という所有形容詞がなくなり、たんなる定冠詞付きの「自然」となる。フェヌロンにより近かったものが、「自然」につく所有形容詞が定冠詞にかえられることによってルソーのものになるといえよう。

このように、第3章と第10章の「書き出し」において、極限まで押し進められた凝縮、もはやその名に値しない「折衷主義」によって、科学論的あるいはイデオロギー的な矛盾は一つの文のなかに吸収させられている。これは、作家がしばしば友人や批評家から非難されたような理解不足や専門書の誤読によるものではない。そして、管見によれば、美学の知にたいする優越を意味しているわけでもない。というのも、故意にコンテキストを剥奪されたこの種の文がつくり出されるにあたって、美学的効果のために科学論的側面が無視されたわけではないからである。逆に、科学論的文脈を再構成してはじめて、この種の文が、いっけん何の変哲もない様相を呈しながら、いかに狂気じみており、理解不能なものであるかが理解されるのである。科学論的両義性の言語的組み込みの批評的射程を正確に評価するには、科学論と生成論の両方が同じ資格で動員されなければならないのである。

書き換えと知の凝縮によって生み出されるこの種の文が、化学においても、教育学においても、「— et」（ダッシュと接続詞「そして」）に先立たれているのは、単なる偶然だろうか？ フロベールの名高い、「運動の」あるいは「叙事詩的な et（「そして」）」と「離脱のダッシュ」の結びつき。『ブヴァールとペキュシェ』において「— et」がほとんど体系的に用いられているとするなら、「— et」の科学論的読解を試みることも可能なのではないだろうか？

最後に、死の直前のフロベールが、『ブヴァールとペキュシェ』第10章の植物学の挿話のために、ある植物、彼によればいわゆる「例外の例外」になるはずの植物を発見しようと躍起になっていたことについて一言触れておきたい。「もし例外そのものが正しくないなら、いったい何を信用すればいいのだろう」²⁰という結論に至るには、「例外の例外」となる植物が存在していなければならなかった。その問題の植物をついに見つけたときの幸福感を、フロベールは次のように語っている。

ギィ[・ド・モーパッサン]が植物の情報を送ってくれた！ 私は正しかった！ ボードリ氏の負けだ！ 私の情報は、植物園の植物学の教授から得たものだ。なぜ私は正しかったかといえば、それは、美学は真であり、ある程度の知的レベルに達すれば（方法さえあれば）、間違えることはないからだ。現実理想に屈するのではなく、理想の裏付けとなるのだ²¹。

作家にとっては不幸なことに、彼の「発見」をそのまま受け取ることはできない。モーパッサンの協力によってフロベールが発見した植物は、「shérarde」あるいは「shérardie」、日本語ではハナヤエムグラと呼ばれているが、これはアカネ科に属する植物であり、ユリ科ではない。ところが、本文中では、「大部分のユリ科の植物にはそれ[^{がく}]がない」²²と書かれている。すなわち、例外の例外、いわば第二段階の例外を構成するための前提となるべき「第一段階の」例外はあくまでユリ科について言われたものである。従って、アカネ科のハナヤエムグラは、「例外の例外」にはなりえない。このような誤解は、先に引用した手紙の日付

19 下線は引用者。

20 BP, p. 360.

21 カロリーヌ宛、1880年5月2日、*Œuvres complètes*, t. 16, Club de l'Honnête Homme, p. 359. 下線は引用者。

22 BP, p. 360.

——これはフロベールの死の一週間前にあたる——からもわかるように、この箇所が作者の死の直前に手を入れられたことによるのであり、該当する下書き、フォリオ228, g224を見ると、ユリ科とアカネ科との間でどちらかを選択して整合性を与えることなく、両者が併存したままの状態であることがわかる。このあたりの事情は、ステファニー・ドール＝クルレの校訂版ではより明らかになっている。

しかし、われわれの関心は、必ずしもそのような校訂上の問題ではない。ここで意義深く思われるのは、「例外の例外」を見つけることができると作家が思った、その理由である。

[前略] わたしには例外の例外が必要です。ジュネーヴ市民の「大部分の」という語から思いついたいたずらなのだがね²³。

「例外の例外」という発想の源となったのは、「ジュネーヴ市民」すなわちルソーの「大部分の」という一語だった²⁴。とすれば、フロベールが先の引用で言及していた「方法」とは、文学者の著した書物のなかに科学的根拠を求めようとする態度ということになる。「現実には理想に屈するのではなく、理想の裏付けとなる」とフロベールが言うとき、「理想」とは、つまるところ、ルソーの記した一語、すなわち書かれたことばというのだろうか？ そうとすれば、ここで表明されているのは、文学と科学の区別を越えたところにある、言語への信頼あるいは信仰ということになる。それが文学的言語であろうと科学的言語であろうと、言語であることの同一性、クーンのいう共約不可能性の対極にあるものとしての、いわば「共約可能性」のようなものが問題になっているのではないか。対象世界を記述する方法の違いを越えた、ほとんど文法的のといってよい言語機能への深い信頼あるいは信仰。科学に関するにせよ因果関係原因結果を産出し、個人的なものであれ集団的なものであれ理解不可能なことがらであっても、それを語りの原動力として動機付けすることを可能にするような、言語の文法機能が問題になっているのである。

23 モーパッサン宛、1880年4月25日頃、前掲書、p. 357. 強調は原文による。

24 より正確には、ルソーは『植物学についての手紙』では、「ほとんど全ての他の植物にある萼は、すべてのユリ科と呼ぶにふさわしい全ての植物には欠けている」（前掲書、p. 1154. 下線引用者）と述べており、「大部分の」という語は用いていない。それが見られるのは、フロベール自身の読書ノート（フォリオ174, g226⁽²⁾）のなかである。

質疑応答

エリック・ル＝カルヴェーズ とても説得力のあるお話でした。お伺いしたいことが二点あります。私が興味深いと思うのは、二つのもののあいだに因果関係があらかじめ立てられていて、後に最初とは別のものが原因となってしまうことです。あなたは書き出し部分の草稿をすべてご覧になっていますか。「dimanche」の語が草稿の改訂の過程で移動しています。この「dimanche」の語は三つ目のパラグラフの最後に置かれることとなります。このとき、フローベールにとって、変容のシステムといったようなものがあつたのではないのでしょうか。つまり、「dimanche」の語を移動させた後も、冒頭の因果関係を残そうとするのだけれど、その因果関係の中身は変えざるを得なかったといったことです。

和田光昌 第3章と第10章の出だしの部分に関しては、すべての草稿を見ました。第1章の出だしの部分も見ましたが、私の記憶が正しければ、「dimanche」の位置は引用したフォリオ以外では殆ど変わっていません。再び確認しておきたいと思います。

ル＝カルヴェーズ 二番目の質問ですが、草稿に見られる化学に関する引用は、真正なものでしょうか、それとも『ブヴァールとペキュシェ』で頻繁に行われるように、捏造されたものなのでしょうか。

和田 化学に関する読書ノートは存在していたらしいのですが、現在は失われてしまいました。しかし、フローベールが参照した本に下書きの中とほぼ同じ表現の文を確認することはできました。

松澤和宏 発表の最後で、あなたはトマス・クーンの用語を用いながら論を展開しようとしていらっしゃいましたが、この「共約可能性」あるいは「共約不可能性」といったクーンの概念を、フローベールそして『ブヴァールとペキュシェ』との関連でもう少し詳しく説明していただけませんか。

和田 『ブヴァールとペキュシェ』に関して特に言われることですが、知と美的なものをことさらに区別しようとする傾向に違和感を感じたことが私の出発点です。フ

ローベールが文体の美的効果を優先して、書物から得た当時の認識論的な知見を犠牲にしたと言ってしまうのは少々安易すぎます。文学と科学がどのように絡み合っているのかをもう少し明らかにしたいと考え、そのような文脈でクーンの語を使おうと思ったのです。

ジゼル・セジャンジェール あなたが因果性についての考察から発表をお始めになったことは重要であると思われます。小説の書き出しが内包している見せ掛けの因果関係が、間をおかずして、小説が呈示する問題、因果性の問題、別様でもあり得た物同士の因果関係へと、読者の注意を引きつけているのです。

和田 まさしくおっしゃる通りです。その間違つた因果関係は、「comme」という、取るに足らないような短い言葉から生じているのです。第1章は「comme」の語で始まっていますが、他のケースでは、フローベールは、科学書の中から出だしの単語を選んで選んでいます。科学書から持ってこられたこれらの単語は、脱コンテキスト化された言葉といえます。このような脱コンテキスト化のプロセスにおいて彼は、特異な仕方でもって、小説の語りの上での要請と科学的厳密さの要請とを混ぜ合わせているのです。

セジャンジェール まさしくそうです。それはたった一つの語、短い語なのです。しかし同時に……

和田 それは非常に重要な語なのです。

エリック・ボルダス 接続詞に関して、フロランス・ペレグリニが博士論文の中で、『ブヴァールとペキュシェ』では「car」の語が全く使われていない点を強調しています。この「car」の語は、諸知識についての小説なら当然用いられてもよさそうな接続詞であるのに、「puisque」はあっても、この「car」は小説には存在していないのです。また「comme」ですが、ラテン語法的には、この接続詞は因果関係を示すものであると同時に、時間的なつながりを示すものでもあるのです。よって問題の書き出しの文章は、因果性の役割と時間性の役割のあいだでの曖昧さを含んでいるといえます。

和田 非常に有益なご指摘、ありがとうございます。